

消えた石橋

赤 峯 重 信

はじめに

庄内町の三重野喜津夫家は、府内藩奥郷蛇口組の大庄屋であった。数年前、県史の資料調査に同家を訪れた折「諸願書一切控帳 蛇口組」の中に、石橋の文字があったのが記憶に残っていた。今回、解読が終つてその石橋の所在を三重野氏に尋ねたところ、そんな石橋は無いという返事がかえつて来た。

消えた石橋ではあるが（残念ながら何時この石橋が消滅したのか不明）、資料には、その発端から完成までが記るされている。

この石橋架設は天保二年（一八三一）に完工しているが、県内の石橋では古い方に属するとか、また、架設の経緯（い

きまつ・期間・石工・費用等）が比較的詳細に記されて、資料としても面白いとのこと、ここに紹介する。

〔大要〕

一 位置 富村（庄内町柿原）より甲斐田村（庄内町高岡）への境、高橋という所。（現在の九電柿原発電所の下流約五〇メートル）

一 文政四年（一八二二）より板橋であったものゝ掛替。

一 費用 幕領長野村の兵右衛門、五銭札式貫文寄進。領内並びに近隣他藩村々よりの奉加。竹木・人夫は藩よりの援助。

一 石工 肥後領の往還に石橋を架設した備前の石工。

一 期間 文政十三年寅十月より工事開始、天保二年卯十一月十六日に竣工渡り初。

「諸願書一切控帳 蛇口組」（三重野家文書）

奉願上覧

一 富村の甲斐田村へ之境川高橋と申所、御用状次之往来橋

ニ御座り所、拾ヶ年以前巳年（文政四年）御願申上板橋掛

致申り所近頃橋板弱申りて通路危相成申り

尚又川丈ニテ洪水等之節は外ニ通路之場所無御座ハハ

是非掛替申度有之ハハへとも是迄之通板橋ニ仕ハハても損方強

年數持堪不申如何可仕ハ哉と奉存居申ハ

折節、御領長野村兵右衛門と申者方々内分とて申参ハハニは

高橋之義、大分損方相見申ハハ何卒石橋へ思召立被レ成間敷

哉、若石橋ニ相成ハハ私五錢貳貫目丈御寄進可レ申と申

参ハハ依レ之右兵右衛門方へ罷越掛合仕ハハ処 弥相違無御

座ハハ併其余之入ケと申、是迄少々も心当無御座ハハへハ御

領分一統御隣端迄も御免被レ成下ハハ成丈相對之致ニ加

奉レ石橋成就仕度奉レ存ハハ間何卒竹木人夫之義ハ御上ル被レ

下置ハハ様奉ニ願上ハハ乍レ恐御見分被レ遊ハハ上願之通被レ

為ニ仰付レ被レ下ハハ大工并石工之方へ積方等為レ致見申度

奉レ存ハハ何分大造之義と奉レ存ハハへは急度成就可レ仕程ハ難

計奉レ存ハハへハ若成就仕ハハ領分御他領共諸人之為ニ相

成ハハ哉与奉レ存ハハへハ存立見申度奉レ存ハハ

此段宜被ニ仰上ニ可レ被レ下ハハ以上

寅閏四月 甲斐田村組頭 齊右衛門

三代吉

藤兵衛

仁兵衛

折右衛門

甲斐田村庄屋 蛇口村大庄屋 三重野又右衛門

奉願上口上覽

一 甲斐田村ノ富村へ御用状次之境川高橋此度石橋ニ仕度奉レ

存ハハニ付其段先達て御窺奉ニ申上ハハハハ、願之通被ニ仰付ハハ

難レ有奉レ存ハハ右ニ付川道兩御奉行様方御見分被レ為ニ成下ハハ

ハハ様奉ニ願上ハハ尚又右一同ニ御窺奉ニ申上ハハハハ相對奉加近

日ノ罷出申度奉存ハハ御繁 多之御中ニハ御座ハハへ共何卒近

々御見分奉ニ願上ハハ左ハハへハ遠方御他領迄其趣相聞奉加ニ

罷越ハハ先々諸人之疑心無御座ハハ一入奉加施入之為筋ニ相成

ハハ義ニ御座ハハ幾重ニも奉ニ願上ハハ此段宜被ニ仰上ニ可レ被レ下

ハハ以上

寅七月

甲斐田村組頭 齊右衛門

三代吉

藤兵衛

仁兵衛

同村庄屋

折右衛門

天保二年卯二月

蛇口組大庄屋

三重野又右衛門

乍恐御願奉_レ申上_二口上方

牧富右衛門様御手代

辻伝兵衛殿

一 甲斐田村石橋普請仕度奉_レ存_二付 其段去春奉_レ親_レ之

処、願之通被_レ為_二仰付_一難_レ有奉_レ存_二 其後石工方へ相談仕

川方 牧金兵衛様

来仕_レ只今之趣ニ御座_レハハ四月中ニハ橋成就可_レ仕由石

道方 菅野善右衛門様

工方申出_レ 左_レハハ切石取越并橋面組石垣凡八十坪程之

御願奉_二申上_一覚

塊石持寄之人夫大分之義ニて甚倒(当)惑仕_レ 尤去ル十

一 別書ニ奉_二申上_二通此度石橋普請ニ取掛り申_二付石工之

義ハ備前之職人近来肥後御領内ニ参り往還筋石橋數ヶ所掛

申_レて至て出来方宜御座_レ趣、右御領役分の方を委細咄合

承申_レ 幸只今野津原村ニて石橋掛居申_レ由ニ御座_レ他國

之職人ニ御座_レハ共是ニ奉_レ頼申_レても御領内式筋の方ニ

故障之義無御座_レハハ右備前之石工ニ相談極申度奉_レ存_二間

此段御伺奉_二申上_二以上

寅七月

甲斐田村組頭中

庄屋

大庄屋

御代官御手代

月以來三四十人程も出夫仕_レハ共是迄之分ハ村内ニて出精

仕 外村へハ決て加勢相願不_レ申間ヲ合セ申_レハ共是方後

ハ日々多人數無_二御座_一以てハ難_レ成仕事計_二て御座_レ

殊ニ御井出筋所々御普請之節ニ御座_レ故石工の方へも種々

及ニ相談申_レハハ彼方方申_レ処ハ下橋計リヲ此方方掛ケ申

以て其余之義ハ一切石工の方ニ請ケニ渡申_レ得ハ人夫入方

過半減方ニ相成可_レ申由ニ御座_レ得共夫_レニてハ作料銀高

至て大搜ニ御座_レ 尤奉加も去秋奥郷丈參申_レ処存之外銀

高出来仕_レ尚々御領内御他領共ニ手配仕罷出無_二油断_一奉加

仕_レハハ橋入用丈ハ出来仕と奉_レ存_レハ共是ハ銀札寄方も

漸々之義ニて当座ニハ集不_レ申_レ故石工へ受ニて渡_レ義_レ曉_レ

相極がたく進退相迫居申^ハ 無^レ據此方^ノ断申普請暫止方
 ニ可^レ仕と申上^ハ石工^ノ方合点可^レ仕^ハへ共遠^ノ國^ノ之職人故外
 所へ普請致掛^リ申^ハへハヌ^ハ此方勝手能^レ節參^ル義難^レ計、
 附てハ是迄奉^レ加施入^ル仕^ハ人々氣受^モ不^レ宜様相成^レ申且又
 普請中絶仕再三取立^テハ每事新規ニ相成前後雜用大分費
 迷惑仕^ハ尚又石工え人夫積^リ為^レ仕^ハ処只今^ノ後^ノ之分凡六
 千人程ハ入^可申^ト之義ニ御座^ハ 尤去十月^ノ是迄村内ニ
 て出夫仕^ハ夫数千式百人余ニ御座^ハ此上之所ハ何共乍^レ恐
 御上へ御歎奉^ニ申上^ニ人夫被^ニ下置^ハ梯御歎申上度奉^レ存^ハ
 へとも御繁多御中尚又御井出御普請ニ取雜奉^ニ願上^ニ義 恐
 多奉^レ存^ハ問何卒右積高程賃せん夫にて被^ニ下置^ハハハ夫
 ヲ当^テニ石工^ノ方へ請^ケニ相渡申度奉^レ存^ハ其義相叶^レ申
 へハ御領内中老石高ニ銀札五分ツツ寸志貰受申度奉^レ存
 何卒此段御上^ノ方村々え被^ニ仰付^レ被^ニ下^ハ様奉^ニ願上^ニ成丈
 ケ奉^レ加^ノ之方出情仕可^レ申^ハへとも氣^當之義無^ニ御座^ハ而
 は受^ケニ相渡義不安心ニ奉^レ存^ハ 且石にて仕^ハ分惣積^リ
 銀高別紙書立^レ之通ニ御座^ハ 去春以來是迄セ話仕来申^ハ処
 人夫一条之処ニ差詰^リ手段尽果申^ハ問何卒以^ニ御慈悲^ニ右兩

様之内何^レ之筋ニも被^レ為^ニ仰付^レ被^ニ下^ハハ難^レ有仕合ニ
 奉^レ存^ハ此段幾重ニも宜被^レ仰上^ハ以上

卯二月

甲斐田村組頭

庄屋

蛇口村大庄屋

牧富右衛門様御手代

辻 伝兵衛殿

高橋普請入用書立寛

一金四十八兩 但橋石半月切取立迄ニ受渡石工賃

此札八^ノ六十四匁 尤兩ニ付札百六十八匁トシテ

一 銀五百四十六匁

但手摺石捨巻本ニ付 代銀十三匁ツツ

柱数大小四十二本分如此

此札卷^ノ四百十九匁六分尤銀百三十匁替^ニテ

一 〃百八十匁

但延石廿間七寸ニ九分賃錢卷間銀九匁ツツ

此札四百六十八匁 右同断札式匁六分かへ

一 〃八十五匁 柱石捨賃錢

此札式百廿壹匁 右同断式匁六分かへ

一 〃 八百匁

但石垣取賃錢 壹坪ニ付 銀十匁掛

坪數八十坪トシテ

此札式〃八十目 右同断式匁六分がへ

〃札十式〃式百五十式匁六分

一 金七十兩

但橋石石垣石ぐれ石七隈拵へ 夫迄一切持出シ掛ケ夫共ニ

受ケニ渡ルへは賃錢如此

此札十一〃百七十六匁

尤壹兩ニ付札百六十八匁がえにて

一 銀札五百目 但葶繩代

一 〃 式〃目 但下橋拵賃錢

一 〃 五百目 但兩方橋段(爪)之処

岩切賃せん

一 〃 三百目 但寄手道造り 岩切賃せん

一 〃 三百五拾目 但下々橋取除取除賃錢用

一 〃 〃 三〃目 但諸雜用

〃十七〃八百廿六匁

二口

合五札三拾貫七十八匁六分

書付卯二月

甲斐田村

奉願覺

一 柱物拾五本 但長三間半、式尺四寸回り

一 丸木式百五拾本 但長壹丈式尺 壹尺五寸まわり

一 樺木十四本 但長壹丈式尺 式尺四寸回

一 大竹五拾本

右ハ先達而奉申上ニハ通高はし普請入用竹木願之内前断之分不足仕ル 尤其余分は 御公料長野村兵右衛門と申仁此はし普請發起之施主人にて御座ルニ付相談仕ル処同人方々寄進仕くれハ管ニ相成申ハ間右丈ケ之分竹木当村高(馬)負荒子の内にて御見分被レ遊被レ下御上へ被ニ仰付ニ被レ下ハ様奉ニ願上ニハ何分下橋仕迄甚々差支申ハハ御繁多之御中ニ何共乍レ恐近々後御見分被レ為レ遊被下ハ様奉ニ願上ニハ以上

卯五月

甲斐田村組頭

庄屋

大庄屋

御代官御手代

秦野小平次殿

衛藤□右衛門殿

奉願覚

一 甲斐田村石橋御普請成就仕ハ間来ル十六日日柄宜御座ハ

ニ付何卒 道大御奉行様 御代官様 御両所様 御通初被下レ成ハ様乍レ恐

奉ニ願上レハ 以ニ御慈悲ニ願之通被為仰付被下レハハ 嚴重

ニも相成諸方奉加等寄方も 宜村方為筋ニも相成ハ義故難レ

有奉レ存ハ此段宜被ニ仰上ニ可レ被下レハ以上

卯 十一月

甲斐田村組頭 藤兵衛

庄屋 折之助

蛇口村大庄屋 三重野又右衛門

牧富右衛門様御手代

辻 伝兵衛殿

一 同日甲斐田村石橋御普請成就仕ハニ付来ル十六日日柄も宜

御座ハ間 道奉行渡初被下レ様奉願段庄屋組頭蛇口村大庄

屋連印書付赤石武右衛門差出ハニ付願之通申付ハ

道奉行管井善右衛門被仰付ハ様御用人方エ申達之

(大分市誌編さん室囑託・大分市敷戸団地一八)

大分県地方史料叢書(七)

縣 治 概 略 Ⅲ

(完 結)

大分県成立期の布告・達を集大成した

地方史研究者必備の書。

本巻は明治八年分を収録する。

(会員一五〇〇円、会員外二〇〇〇円)

発行者 大分県地方史研究会